

# からしだね



2016年  
10月号(520号)

キリストの受難

カトリック池田教会

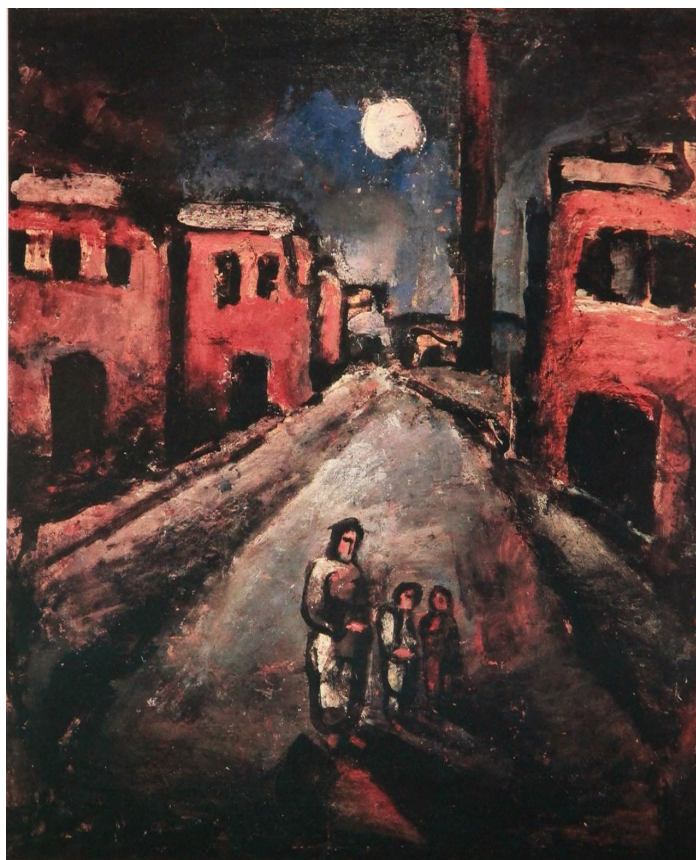
共同宣教司牧：畠 基幸 神父・中村克徳 神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL : 072-751-2400 FAX : 072-753-4624

URL(ホームページ) :

[http://www.wombat.zaq.ne.jp/catholic\\_ikeda/](http://www.wombat.zaq.ne.jp/catholic_ikeda/)



巻頭言 祈りの恵み 中村克徳 C.P.	2	マリッジ・エンカウンター・ウィークエンド……	7
10月のガラスケースのことば ……	2	「彼が担ったのは我々のやまいであり、……」	7
デニス・マクゴワン神父 の2つの寄稿 ……	3	松本神父さまの思い出 ……	9
発言の多かった平和旬間集会 ……	4	松本神父さまの巻頭言3篇(復刻) ……	9
楽しかった日曜学校合同キャンプ報告……	5	松本神父さまに関する原稿 etc の募集 ……	11
ドレミの会のバーベキュー・キャンプ ……	6	健軍カトリック教会からの手紙 ……	12
聖堂の床に2年振りにワックス掛け ……	7	表紙の絵画「郊外のキリスト」について……	12
第2回「大人の日曜学校」の報告 ……	7	黙想会のお知らせ 宝塚黙想の家から ……	12

## 巻頭言

## 祈りの恵み

中村 克徳 C.P.

「祈ってください」「祈りますね」。わたしたちは教会の信徒さんや親しい人との会話の中で、祈るという言葉をよく使います。病気や何か不測の事態が起こったときには、すぎるような気持ちで祈りを頼みます。それは教会の伝統であるばかりでなく、人間としての素直な心の表れではないかと思うのです。

もう10年近く前になりますが、前の教会でこのような体験をしました。土曜日のタミサを終えて信者さんと挨拶を交わしていると、一人のご婦人がわたしの前にやってきました。「神父様、わたしの主人に洗礼を授けてくださいませんか？」話を聞いてみたところ、彼女の御主人は重い病気で入院中であり、洗礼を望んでいるようなのです。彼は小さな会社を経営していて、仕事が忙しくて教会に行く時間が取れず、要理の勉強には行けずじまいでした。主任神父様に相談すると、「あなたが行って洗礼を授けてきてください」と言われたため、二日後に洗礼を授けることになりました。

教会の信徒さんに案内されて彼の病室を訪ねようとしたところ、ひとつ前の病室に見慣れた名前が掲げられているのに気がつきました。わたしがいる教会に所属する年配の信徒さんのお名前でした。そこで、洗礼の前にご聖体を授けようとお訪ねすると、「神父さん、よく来てくれました。今日はね、体調がいいんですよ」と言って、笑顔で迎えてくれたのです。彼にご聖体を授けてから隣の病室に行くと、50代半ばの穏やかな顔つきの男性がベッドに横たわっていました。「主の祈りは唱えられますか？」と尋ねると、「はい」と返事が返ってきました。

傍らで付き添っている奥様が一冊の祈りの本を私に差し出しました。それは小さな携帯用の祈りの本で、ボロボロの状態でした。「よく祈りこみましたね」と言う、「神父様、三冊目です」と奥さんが言うので驚きました。じっくり祈る時間が取れないので、いつもポケットに入れて時間を見つけてはお祈りしていたのでしよう。

受洗する準備はしっかりできているので、いざ洗礼を授けようとする、ひとつ忘れていたことに気がつきました。代父になる人を用意していなかったのです。そこで、隣室の信者さんに代父をお願いすると、快く引き受けてくださいました。しばらくして隣室の信者さんが点滴を携えて入って来られました。お互い初対面でしたが、このような形で代父と代子に結ばれたことを笑顔で語り合う二人の姿は忘れられません。帰り際に、代父となった信者さんが私にこう話してくれました。「神父さん、私の趣味はね、代父になることなんです。全国に100人以上の代子がいます」。

この出来事を通して、わたしは祈りの力の偉大さを改めて感じさせられました。神様は、彼が常日頃から祈りを大切に、洗礼の恵みにあずかることを強く望んでいることをよくご存じだったのでしよう。人生の終わりに、神様はご自分のもとにこの人を招き入れてくださったのです。代父となられた信者さんも、最後に大きな務めを果たすことができました。祈りはわたしたちの思いを遥かに超えて働き、神様の恵みをもたらす大きな力を秘めています。日々の祈りと務めを大切に、神様のはからいを希望をもって待ち望んでいきましょう。

10月のガラスケースのことば  
「わたしは復活であり 命である  
わたしを信じる者は たとえ死んでも生きる」

ヨハネ11・25

## デニス・マクゴワン神父の2つの寄稿

## もしもねずみに聖書をあげたら

次から次へとつながって……

『もしもねずみにクッキーをあげると』(ローラ・ジョフィ・ニューメロフ作 青山南訳 岩崎書店)という絵本(注1)は、とてもおもしろいです。では、もしも、そのねずみが日本のねずみだったら、どうなるでしょうか？ ねずみはクッキーじゃなくて、きっとセンベイを欲しがると思います。そうすると次は、温かい日本茶を飲みたいと、言うでしょう。もし桜の頃だったら、桜の木の下でお茶を注いでください、と頼みます。次は、座りたいのでゴザを持ってきて、と言うでしょう。その次には、花見にお酒は付きものだから、一升瓶でお願いします、となります。その次は盃が欲しくなります。そのあとは歌いたくなって、ポータブルのカラオケセットが要りますとお願いするでしょう。

もしも聖書が神のみ言葉でないなら、もしも神様が全能でないなら、もしもイエズス様が神の子でないなら、などと考え始めても、頭を悩ませることになります。

聖書は神の言葉だと考えてみましょう。それは神様が言葉の一つ一つに至るまで指示して書かせた、ということではありません。神様は「わたしはいつもあなた方と共にいる」という一番大事なメッセージが失われないように、計らっておられるだけなのです。それ以外の文章は聖書を書く人たちの工夫と想像力に委ねられました。

もしも神様が全能でないなら、人間の持つ悪に対して、解決策はありません。人間は悪から抜け出すことができず、しかもその状態がどんどん悪くなっていくだけでしょ。そう考えなくなかったら、ヨブ記の作者のように、この世の悪について悩んだ末、最後に神様は全能なのだから、わたしたちに道を示してくださいと信じるようになります。

もしもイエズス様が神の子でないなら、聖書よりもアメリカの独立宣言書やリンカーンのゲティズバーグ演説を大事にしたほうがいいでしょう。では、「受肉したみ言葉」について考えてみましょう。イエズス様は、初期のキリスト教異端者が主張したように、すばらしく善い人間というだけではありませんでし

た。別の人たちが考えたように、イエズス様の人間性はまぼろしでもなかったのです。イエズス様は神と人間という二つの存在が結びついた形でもなかった。イエズス様の中で、神は完全に人間となっておられるので、イエズス様ご自身でさえ、何が起きているのかよくわかっていなかったのです。イエズス様はゲッセマネの園で「父よ、できることなら、この盃を取り除いてください。でも御心のままに」と祈りました。これはイエズス様が「わたしはいつもあなた方と共にいる」という神の言葉への信頼を示すただ一つの祈り方だったのです。復活したとき、一番驚いたのは、きっとイエズス様ご自身だったでしょう。

もしも聖書が神のみ言葉でないなら、などの“もしも”が全部ほんとうだったとしたら、わたしたちは自分が死んだあと、家族アルバムの写真で思いだしてもらえないくらいしか、未来はありません。もしかしたら、それすらもないかもしれません。

注1: 絵本『もしもねずみにクッキーをあげると』は、ねずみにクッキーをあげると次に牛乳をくれと言い、次にストローをくれ、飲み終わると次にナプキン、というように次々と必要なもの欲しいものが出てきてキリがない、という話です。読んでいると主人公のねずみが自分の姿とダブります。

(翻訳と注 広報委員会)

## 手作りのロザリオの祈り

ロザリオは単純な祈りです。主の祈りと天使祝詞の祈りをくり返しながらいエズス様のこと、マリア様のことを黙想します。唱え方は全く自由ですが、すでに「手作りのロザリオの祈り」をプリントして、いくつかのテーマを皆さんに紹介しました。(注2)

やり方はテーマの一つだけを選んで黙想し、最後にその中の一つの言葉を選びくり返し祈るようにお勧めしました。今回はもう一つの新しいテーマ、希望を失わない(ダメだと思った時の祈り)、を紹介したいと思います。

テーマ: 希望を失わない (ダメだと思った時の祈り)

(1) エリコの町の盲人 ルカ18-35

“イエス あわれんで”

(2) ヤイロの娘 マルコ5-21~45

“はやくはやく”



- (3)カナンの子 マタイ15-21～25  
“パンくずだけ”
- (4)ペトロは水の上を歩く マタイ14-29  
“沈む”
- (5)エマオの弟子 ルカ24-13～35  
“決してあなたは離れないように”

(注2):デニス神父は2015年に「手作りのロザリオの祈り」を紹介するプリントを配られました。それによると、「手作り」の意味は、伝統的な喜び・悲しみ・栄えの3つの玄義ではなく、聖書を読みながら自分で黙想する章・節を選ぶ方法です。例えば、一つのテーマを選んで聖書の中にそれについての話を探します。2015年の「手作りのロザリオの祈り」に挙げられているテーマは鳥の玄義、舟の玄義、旅の玄義、イエズスとの出会いの玄義、たとえ話の玄義、の5つです。それぞれのテーマに適う象徴的な言葉がありますが、テーマ「たとえ話の玄義」には“種まき”、“よきサマリア人”、“よき牧者”、“放蕩息子”、“貧しいラザロ”の5つの言葉が出典とともに記されています。

## 発言の多かった平和旬間集会

社会活動委員会からの報告

8月7日(日)、平和旬間の集会をミサ後に池田教会カール記念館ホールで開催しました。本年はこれまでの映画やDVDの鑑賞会や講演会を中心とする集会とは異なり、平和の有難さや幸せを次の世代にも引き継ぐために、子供たち(中高生と青年会のメンバー)に一つの役割を担って参加してもらう形を採りました。絵本「ガラスのウサギ」を朗読し、8名の子供と50名の大人が6班に分かれて感想や思いを分かち合いました。

「ガラスのウサギ」は20分程度に収まるように作成した台本を子供たちが順に朗読し、音響と絵本からの絵を投影する準備を重ねました。進行役を決めて子供たちにも発言できるようにした分かち合

いはどの班も活発で、大人たちの過去の直接、間接の戦争体験にも子ども達は一生懸命耳を傾け、予定した30分が経過したので終了することを告げると、全ての班のメンバーが話は途中なのにと言わんばかりに、一斉に司会者の方に顔を挙げました。分かち合いが佳境にあったのを読み取れなかったのは反省点。

参加した子供たちが感想を寄せてくれましたが、「ガラスのウサギ」の感想だけでなく、平和を続ける思いも分かち合うことができたようです。



子ども達が「ガラスのウサギ」を朗読するのを聞く大人たち

### 集会に参加した子供たちの感想

◇周りの人たちの体験を聞いて戦争の恐ろしさや悲惨さを実感しました。戦争はなくなるかもしれませんが、それでも平和を祈り続けたいです。

中学1年 マイヤー

◆分かち合いで、原爆が落ちるのを見た人や、戦争に行つて父、兄を亡くした方たちの話を聞きました。話をしたり、書くことはやっぱり悲しいと言っていて、僕は二度と思い出したくないと思っても思いを残しておかないといけないと思ひ、絶対に戦争をおこしたくないと思いました。

中学1年 大川

◇戦争はとても悲さんでやってはいけないことがよくわかりました。大人のお話しはわかりやすく戦争が二度と起こらないように願っています。

中学3年 新免

◆「ガラスのウサギ」を読んでみて、まず、感じたことは「現代では考えられない、ありえないことだな」でした。しかし、その「ありえないこと」が約70年前には起こっていたんだとも思いました。例えば、母と妹が亡くなったシーンでは、遺体が見つからないのに亡くなったことを認めなくてはならない。わたしだったら遺体がないのなら死んだとは認めないと主張す

るでしょう。また、母が亡くなって1年以内に父が亡くなるとなると私だったら支えがなくなるので自殺してしまうかもしれません。しかし、そこで前を向いて力強く生きていこうとした敏子さん(作者)の姿に感動しました。分かち合いでは、戦争を経験された方のお話を始め、わたしの知らなかった当時の歴史的背景など、新しい知識が増え、とても有意義なものとなりました。「当時は戦争のメリット、しかも、かなり正当性が有るような事を言って、国民をその気にさせ、戦争を進めて行った」という意見がわたしにとって衝撃的で、一番印象に残りました。また、このような機会があれば、ぜひ、参加したいと思えます。

高校1年 島田

◇わかち合いの前にあった朗読では、「ガラスのウサギ」を読みました。それは太平洋戦争中に生きた一人の女の子の話です。(一部略) 分かち合いでは様々な意見を聞くことができました。そこで僕が一番実感したことは、戦争を実際に体験したことのある人たちが減ってきているということです。僕が

小学生のころ、70歳の人たちは皆、戦争体験者でした。でも、今、70歳の人たちはあの戦争を実際に体験したことはありません。そして、戦争の体験者が減って行くに伴って、戦争の記憶は風化してゆくと思います。むしろ、それが自然な流れだと言えるかもしれません。でも、決して風化させてはいけない記憶もあると思います。それは、今、僕たちが生きているこの日本という国には、多くの戦火を交え、何人の方が亡くなったのか正確に数えることができないほどの多くの方がたが命を落としたという歴史があるということです。戦争があったという歴史を日本が背負っていたのではなく、そのような歴史を日本が、今、まさに背負っていることにも気づかされた分かち合いでした。

高校3年 村田

◆実際に体験した人の話を聴けて、自分が思っているよりも悲惨だったことを知りました。自分たちだけが被害者ではなく、戦争をしていたのだから、相手も被害者だということを改めて実感しました。

大学2年 閑歳

## 楽しかった日曜学校合同キャンプ報告

### 青少年育成委員会から

今年も日生中央教会との合同で、日曜学校のキャンプが8月2日～4日に、関西学院大学千刈キャンプ場(三田市)にて行われました。一部日帰り参加も含めて、小学生まで16人、中高生12人、青年大学生4人、神父様3人、神学生1人、大人18人、合計54人が参加しました。

猛暑の中でしたが、森の中は直射日光が遮られていて、日中でも野外で過ごすことが可能です。夜はクーラーなしでも眠ることが出来ました。

参加した子ども達に、楽しかったことベスト3をあげてもらくと、キャンプファイヤー、ザリガニ釣り、オリエンテーリング、棒巻きパン作り、スイカ割り、ナイトハイク、が上位を占めました。

これらの楽しいプログラムの合間に、キャンプのテーマ「かみさまのいつくしみってなあに」について、3人の神父様からお話も熱心に聞きました。歌もたくさん歌いました。

青年大学生がリーダーとして先頭に立ち、中高生がサブリーダーとしての役目もしっかり果たしてくれました。普段の日曜学校ではなかなかできない神父様方、神学生とゆつくり交流する時間も持





てました。天国からは松本神父様が、病室からはデニス神父様が祈り見守って下さっているを感じながら、神様の愛の中で過ごす時間になりました。教会の皆さんのお祈り、協力にも感謝しています。ありがとうございました。

(キャンプ担当 T.S)

### 大学生リーダーの感想

小学生の頃参加して以来、10年ぶりのキャンプでした。元気で純粋な子どもたちと、ごはんを作ったりキャンプファイヤーをしたり・・・、天候にも恵まれ怪我もなく、3日間無事終えることができました。

教会そのものがご無沙汰という事もあり、緊張して

いた私でしたが、最初に壁を打ち破ってくれたのは子どもたち。それからずっと子どもたちの笑顔や「聞いて聞いて！」の声に3日間パワーをもらえばなしでした。先日キャンプ後に教会を訪ねた際も、「あ、リーダーのお姉さんや」と声をかけてもらい、とても心が温まったのを覚えています。

社会人を目前に控えた今、キャンプを支える側になり、10年前とは全く違った視点で参加できました。至らない所も多々あったと思いますが、支えて下さった大人リーダーの皆様、神父様神学生、青年リーダーたちに感謝申し上げます。そして子どもたち、ありがとう！

(大学生 野下)



松本神父さまのお写真を中央に

### 「ドレミの会」のバーベキュー・キャンプ

～ダイヘン愛の郷～

今年の夏は、例年になく厳しい暑さがつづきました。8月13日、「ドレミの会」は、夏の恒例の行事、バーベキュー・キャンプ、を畠神父さまと一緒に総勢40名で行いました。

涼しい「愛の郷」では4つのグループに分かれて火を囲み、おいしいお肉や野菜をたっぷり食べ、ゲームとスイカ割に興じて、楽しい一日を過ごしました。

気持ちよく協力して下さったたくさんのボランティアの方々や、無事に実現できた神の恵みに感謝して、最後に畠神父さまのリードで「ハレルヤ！ありがとう！」と大きな声で山にむかって叫びました。神に感謝！！

ドレミの会 村嶋





## 聖堂の床を2年振りにワックス掛け

真夏日(最高温度が35度C以上)が始まった8月上旬の6日に畠神父と中村神父を始め、30名を越す信徒が机・椅子を移動させて聖堂の床をワックスで清掃した。朝9時に、総務委員の指示によって始まった作業は昼食・デザート付おしゃべりを挟んで汚れが除かれた床に机・椅子を戻せたのは午後2時であった。これでも、暑さのために床乾燥を待つ時間が短く済んだらしい。写真は電動回転ブラシを用いたワックス清掃後に溶剤である水の大半を数人がかりで塵取りを用いて回収しているところ。

広報・大野



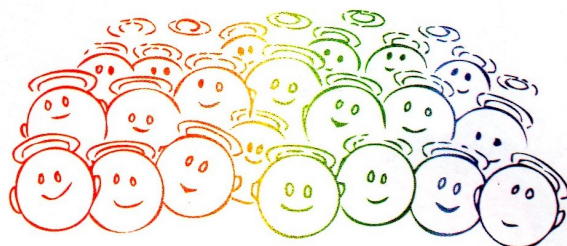
## 第2回「大人の日曜学校」の報告

主の祈りをイエスが弟子たちにお伝えになった福音が第2回「大人の日曜学校」(7月24日)のテーマでした。いつものように参加者が福音を読み味わい、心に残った言葉を語りあいました。この日は「御国が来ますように」、「門をたたきなさい。そうすれば開かれる」、「わたしたちの罪を赦してください」といったところが話題となりました。

毎日のように繰り返されるテロや大規模殺害事件、「汝殺すなかれ」という戒めを簡単に破る人がいかに多いか嘆きと憤りが異口同音に聞かれました。また教会活動も含めた日常生活のなかで、人間関係が災いして心が余裕を失うむずかしさなど、この日の福音も参加者が共感を感じる箇所が多かったようです。

言うまでもなく御言葉を味わうことは信仰生活の基本です。「わかってるけど時間もないし、わたしにはむずかしすぎるわ」という声が聞こえます。ほんとうですね。ただ「大人の日曜学校」は堅苦しいお

勉強の会ではありません。議論もしません。弁舌爽やかに互いを批判することもあります。禁止されているからです。喋らなくてもいいのです。ただ寄り集まって福音を味わう、これだけです。静かな雰囲気の中で次回もわちあいましょう。直



神さまのみ旨によって

私たちは聖人に招かれています

聖人は…



…自分に正直

…聞き上手

## マリッジ・エンカウンター・ウィークエンド ご案内

日時: 11月25日(金)20:00~27日(日)17:00

場所: 御受難修道女会売布修道院

お問合せ先: 赤井

マリッジ・エンカウンター・ウィークエンド(略称: MEウィークエンド)は、家族をはじめ人々との関わりの基本となっている夫婦の関わりを、対話(WE)の中で紹介されるME独特のユニークな方法(す)を通して深めていくことができるように考えられています。それは自分と相手との関係、自分達と神との関係を深く見つめる機会です。結婚生活をより豊かなものにしたいと思うご夫婦であれば、結婚年数に関係なく、どなたでも参加できます。司祭、修道者も参加することができます。

マリッジ・エンカウンターおよびMEウィークエンドの紹介はHP[www.wwme.jp/](http://www.wwme.jp/) 世界各国の活動は[www.wwme.org/](http://www.wwme.org/)で閲覧できます。

## 松本神父の遺産、模範、徳 特集1

「彼が担ったのは我々のやまいであり、  
彼が負ったのは我々の痛みであった・・・」(イザヤ 53:4) 国井 健宏 C.P.

「わたしの思いは あなたたちの思いを遥かに超えている。」(イザヤ 55:9)

松本神父さまのあまりにも早い帰天に、まだ心の整理がついていない状態ですが、今の思いを少しだけまとめてみます。「からしだね」の8-9月号にも出ていますが、彼の大きな、明るい笑顔が印象的でした。いつも控えめで、日常生活では質素で節制を保ち、禁欲的(ascetical)という表現が当てはまる人でした。準管区長になってからは、修道会・小教区・幼稚園のほかに、管区長会議や大司教区の多くの課題を引き受けていました。よくこれだけの仕事ができるなど、感心しながらも、体をこわさなければいいかと、いつも心配していました。それが現実になってしまって、悔やみきれません。

病状がよくないと知らされて急遽売布の修道院に行ったのが7月11日の昼過ぎでした。息は苦しそうでしたが、まさかその夜が御父の家への旅立ちの時とは予想もしませんでした。しかし神父さまの姿を見ていると、イザヤの預言の「苦難のしもべ」のことが重なって見えました(イザヤ53章)。

「彼が担ったのは我々のやまいであり、彼が負ったのは我々の痛みであった・・・」

ほんとうにたくさんの仕事と重い責任を負っていたのに、黙々と働き続けて倒れたのです。

松本神父さまは2004年ごろと思いますが、叙階の前後、がシカゴの修道院に行き英語の勉強をしていました。ザビエル会のブラザー・ピーターという高校の先生がサバティカルで御受難会に泊まっておられ、大学から帰ってきた松本神父の勉強を丁寧に見ていただきました。おかげで英語の上達は目を見張るものだったようです。その頃の日々を知る何人かの友人からメッセージが届いています。今はその一部を紹介して、松本神父の思い出を分かち合いたいと思います。

## ドン・ウェバー神父(前シカゴ管区長)

「Paul がガンだという知らせを受けた三日後に訃報

を受け、びつくりしました・・・最後の時にお父さんやお姉さん、会員の何人かが一緒にいたのを知り、ホッとしています。ご家族にとって大変な悲しみでしょう。Paulは病気を受け入れ、創り主の手に命をお返しする用意はできていたと信じます。お母さんやお祖母さんに「お帰り」といって天国の門で迎えられたことでしょう。それにしても早過ぎる帰省でした。彼は準管区のために最善を尽くしてくれました。皆の意見にとっても気を使い、自分がまだ若く経験も浅いので、年配の会員のことが心配だと言っていました。それでも彼は最善を尽くしてくれました・・・

Paulの帰天は皆さんにとって、特に一緒に叙階を受けた同級生にとって大きな痛手でしょう。彼がシカゴにいた頃の楽しい思い出がたくさんあります。叙階のときにはわたしはブラザー・ピーターと一緒に日本に行きました。ブラザーは現在はザベリオ会のレイビルの修道院におられ、体は弱っていますが頭ははつきりしています。訃報を彼に伝えておきます・・・」

## ジョー・ムーンズ(シカゴ管区管区長)

「日本準管区の皆さんにとって一番若い会員で準管区長を失うのが、どんなに辛いことかお察しします。彼がまだ神学生で三人がウオード神父と一緒に生活していた頃に会っています・・・またシカゴの本部修道院に来て英語の勉強をしていたころを思い出します。いい男でした。彼の逝去は準管区にとって、御受難会全体にとって大きな損失です・・・皆さんのため、そして新しいリーダーのために祈っています。前からの計画があつたでしょうが、神様がすべてを変えられました。乗り越えていくのに時間がかかるかもしれませんが、神様の恵みの中でありのままの現実に直面して進んで行ってください・・・」

## シスター・ロレッタ(シカゴの本部事務所)

「こんなに若くして!・・・ Paulの訃報は大変なショックでした。ここシカゴの修道院にいて、英語の勉強をしていたときには、楽しく明るい人柄で、みんな彼を「好き」になりました・・・涙なしに訃報を読むことができませんでした。Paulは今はイエス様の横に座って、日本の御受難会員のことを話し合い、この試みの時をイエス様が皆と一緒に歩んでくださるようお願いしていることでしょう・・・わたしは本部事務所で働き始



めて30年になりますよ。もう御受難会会員になった気持ちです……」

ブラザー・ラリー・フィン(韓国管区、現在オーストラリアの国際修練院長)

「皆さんもそうでしょうが、わたしも兄弟Paulの訃報にふれて、まだ立ち直ることができません……Paulが今はもっといい所に行ったことは分かっています。しかし彼がもう日本にいないこと、PASPAC(御受難会アジア地区)にいないという悲しみに襲われます。信仰で分かっている、人間の思いはまだ悲しみに満たされています。Paulの葬儀のために日本に行きたいと思いましたが、オーストラリアの田舎からはそう簡単にはできませんでした……」

Paulの後を継がなければならない山内神父さまのために祈っています。

十字架に付けられたキリストにおける兄弟、ラリー・フィン。」

以上のほかにも松本神父さま帰天の悲しみを分かち合ってくれるシカゴ管区の会員がたくさんいました。特にシカゴの合同神学院CTUのメンバーが思いを寄せてくれました。神様のいつくしみは絶対に欠けることがないという信仰の中で悲しんでいます。

池田・日生の皆さんのご厚意、お祈りに心から感謝しています。

(完)

## 松本神父の遺産、模範、徳 特集2

### 松本神父さまの思い出

中川

松本一宏神父さまとの出会いはわたしが池田教会で洗礼を受けた後、暫くしてお母さまの裕子さんとお友達になったときから始まりました。当時小学校入学の前後だと思いますが、私の子供たちと年齢が近かったこともあり神父さまのご家族と大変親しくさせていただきました。神父さまの当時の印象はくりくりした目のどちらかと言えばおとなしくて、少し甘えん坊な子供さんだったと記憶しています。

ずっと後になってからですが、お母さまから司祭の道を目指していらっしゃることを聞いたときはびっくりしました。当時はそのことを予感できるようなエピソードが私の知る限りありませんでしたので……、きっと内に秘めた情熱を持っていらっしゃるのでしょう。

その後再び故郷の埼玉県浦和に帰られた後はお会いする機会が少なくなり、久し振りにお会い

したのは池田教会での初誓願式でした。大きな目は同じですが甘えん坊の目ではなくこれから司祭の道を行く決意、希望、喜びに満ちた目に胸がいつぱいになりました。まだ当時は司祭の卵だったのでこれからの修道生活を無事に歩まれるようにご両親さまはそれはそれは熱心にお祈りなさっていました。ご両親さまとお姉さまの大きな愛情を受けて成長されて、その後の神父さまの大きな支えとなって皆様に愛された神父さまになられたと確信しています。

6年前に帰天されたお母さまの葬儀ミサで立派に司式された時は涙が止まりませんでした。

まさかこんなに早く、大好きなお母さまと再会されることになるとは思ってもみませんでした。未だ受け入れがたい気持ちなのですが、天国からお父さま、お姉さま、池田教会、マリア幼稚園のことを見守って下さい。

(完)

## 松本神父の遺産、模範、徳 特集3

### 巻頭言 息を受ける

からしだね、450号、2010.05

復活祭を祝ってから、ミサでは復活されたイエスが弟子たちの前に現れる場面が語られます。マグダラのマリアとの出会い、漁をする弟子たちとの出会い、エマオへ向かう弟子たちとの出会いなどありますが、中でも私が好きなのは、鍵をかけて閉じこ

もっていた弟子たちにイエスが現れて、息を吹きかけられる場面です。互いに赦し合うようになり、平和をもたらすことができるように、とイエスをご自身の息を注がれます。この場面を読むと、自分にもイエスが息を吹きかけてくださっているように感じます。そして、これこそが復活したイエスに生かされて派遣される、原点のように思えます。

インターネットをうろろしていたらこのような話を見つけました。“ある俳優がいました。何かの席で朗読をせ

がまれた彼は、快く引き受け、何かクエストがあるかとそこにいる人びとに聞きました。すると一人の老神父が、詩編23を頼みました。(詩編23は、主は私の羊飼い、がテーマの詩編です。)俳優は、「いいでしょう。でもひとつ条件があります。私が朗読した後、あなたも同じ詩編を朗読してくれますか」と聞きました。老神父は「私はプロではないけれど、あなたがそう言うのなら」と引き受けました。俳優の朗読は素晴らしいものでした。しっかりした声、抑揚、鍛えられた発声は完璧で、割れんばかりの拍手がわき起こりました。それから、老神父は立ち上がり、同じ詩編を朗読し始めました。その声は特別なものではありませんでしたし、つかえもしましたが、朗読を終えた時、その場にいたすべての人の目には涙が溢れていました。俳優は立ち上がり、震える声で言いました。「皆さん、私の声は皆さんの耳には届きましたが、彼の声は心に届きました。その違いは何でしょうか。私は詩編を知っているだけでしたが、彼は羊飼いを知っていたのです。」

信仰がなくても赦す事はできます。平和のために働く事、平和をもたらす事はできます。立派な事です。でも私たちがそうするのは信仰があるからです。イエスから息を吹きかけているからです。復活したイエスから力を得てするならば、周りの人びとは何か特別な、ひと味違ったものを感じるのではないのでしょうか。羊飼いを知っていた老司祭が語る詩編の言葉が人びとの心を揺さぶったように、イエスに生かされる私たちの姿が福音を述べ伝えていきます。まことの赦しと平和を実現していきます。

『水のこころ』という歌の2番ではこのように歌われます(最近になってこの歌に2番があることをしりました)。“風はつかめません 風はささやきます 目をそっと閉じて 耳をすませて 風はつかめません 風はふれるのです 頬をそっとなでて通り過ぎます 風のこころも 人のこころも” この風のように、イエスの息を受ける私たちが、さらにたくさんの人びとの心に触れて行く事ができますように。(完)

#### 松本神父の遺産、模範、徳 特集4

#### 巻頭言 立とうね

からしだね、471号、2012.04

何年前かに復活祭にもらったカードがユニークでした。(と書き始めて、ひよっとしたら誕生日カードだったかも、という気が。でもうさぎのデザインだったのは確かなのでイースターだった事にします。)想像してください。くチョコレートとうさぎが4匹並んでいて、そのうちの3つは頭をかじられている。残る1匹はヘルメットをか

かぶっていたので食べられずに残っている」というデザインでした。おもわず笑ってしまいました。

このデザインに何の文句もありません。楽しませてもらって感謝しているぐらいです。でも、復活祭を祝う私たちが神学的考察をするとき、一匹残ったうさぎの生き方はイエスのそれとは違うと言わざるをえません。(1枚のカードでいちいちそんな事を考えるのも面倒くさい話ですが。)イエスの復活を祝うという事は、死と復活を祝うという事です。イエスは、何かを必死に守りながら私たちを救おうとされたのではなく、ご自分の命を惜しまずに捧げて、私たちを復活の命へと招いてくださるのです。

イエスが死と復活という神秘を通してどのように私たちを救ってくださるのか、ということについて二つの話を思い出します。一つは、いま個人的にはまっているアメリカのドラマ『ザ・ホワイトハウス』(原題The West Wing)からの1場面です。(このドラマがどれだけ面白いかわかりませんが、それはまた別の機会に)大統領の襲撃事件に巻き込まれ、傷を負ったジョッシュはPTSD(心的外傷後ストレス障害)となり苦しんでいて、彼を支えようとする上司のレオがたとえ話を語るシーンです。レオにはアルコール依存症から回復した経験があるのですが、そこでレオはこのように言います。“ある男が道を歩いていて穴に落ちてしまった。よじ登ろうとしたが出来なかった。医者が通りかかったので「助けてくれ」と叫んだが、医者は処方箋を書いてそれを投げ入れて行ってしまった。次に神父が通りかかったので、「神父さん穴に落ちてしまったんだ、助けてくれ」と叫んだが、神父は祈りを書いた紙を投げ入れて行ってしまった。そこへ友人がやってきた。「助けてくれないか」と言うと、その友人は穴の中に飛び降りた。「何やってんだ、お前まで落ちてどうするんだ」と言う男に友人は言った。「前に落ちた事があるから、上がり方は分かっている」”

もう一つは、ある本(加藤英雄著『神様ってすごーい!!』出版:サンパウロ)の中で紹介されている松浦司教の話です。ある女の子が、ころんで泣いている友達のところを駆け寄って行くのでどうするかと思ったら、その子も一緒に倒れて、それから友達に、にこっと笑って、「立とうね」と言って一緒に立ち上がったというのです。

イエスさまはこのように生きられました。自ら死を体験されて、苦しみを味わわれた救い主です。罪



を除いて私たちとまったく同じ人間になってくださいました。だからこそ救いがあります。何もしないで、自分の身の安全は確保しておいて、それから助けるというような救い主ではありませんでした。私たちがイエスさまの復活をお祝いするとき、この救い主の死と復活を祝っています。私たちの苦しみを共に担ってください、歩いてくださいます。イエスを信じる私たちもまた同じように、それぞれに痛みの経験があり、苦しい体験があり、傷があるけれども、苦しむ人々と共に立ち上がり、前に進みながら、復活の喜びを証していきます。(完)

### 松本神父の遺産、模範、徳 特集5

#### 巻頭言 神さまのいつくしみ

からしだね、514号、2016.03

昨年(2015)の12月8日(無原罪の聖マリアの祭日)から教会はいつくしみの特別聖年を過ごしています。皆さんはどれくらい意識しているでしょうか。ヴァチカンのサン・ピエトロ聖堂をはじめ、世界中の教区では聖なる扉が開かれて、その扉をくぐり、定められた祈りをする事で、特別の恵みがいただけるようになってきました。大阪教区でも、カテドラル(玉造教会)と仁豊野ヴィラに聖なる扉が設置されていますので、巡礼して扉をくぐり、祈りを捧げてみてはいかがでしょうか。

ところで、いつくしみとはなんでしょう。何となく分かるような気もしますが、改めて考えてみると、うまく言えないかもしれません。あわれみ、という言葉も良く耳にしますが、何か違いがあるのでしょうか。私も分かったような気でいましたが、本当のところはかなりぼんやりしています。フランシスコ教皇が出した大勅書によると“いつくしみ一、それはわたしたちの罪という限界にもかかわらず、いつも愛されているという希望を心にもたらすもので、神と人が一つになる道”とあります。

先日、あるシスターがいつくしみをmercy and compassionと訳されたのを聞いて、なるほどと思いました。神さまのいつくしみは、ただ相手のことを思って優しくするとか、何かを与えることに留まるのではなく、他者の思いや体験、生きている現実を自分のものとして共にすることでもあるというのが分かります。また、前田大司教の新生の日メッセージの中で、ユスト高山右近は人々の喜びと悲しみを共に生きることを通して神のいつくしみを生きた、と言われています。やはり、神さまのいつくしみはcompassion(共感)がキーワードかもしれません。

どうしたら私たちは自分以外の被造物と、周りの人々と共感することができるのでしょうか。どうしても自己中心になって、自分の必要を満たすことを求め、自分の視点からしか見ることができません。この世界が抱えているいろいろな苦しみを関係のないものとして考えてしまいます。知らない誰かの喜びを同じ心で喜ぶことをあまりしないかもしれません。違う考えを持つ人々と一緒に歩むのは簡単ではないので、自分の目だけで世界を見て、判断して、進んで行こうとします。

そんな私たちに、いつくしみの特別聖年は神さまの心で、神さまと同じように生きようと教えてくれます。イエス・キリストを通して神さまのいつくしみは完全に現されています。それは忍耐強く私たちを見守り、何度過ちを繰り返しても赦し、愛し続けてくださる姿です。まさに聖書にあるように、放蕩息子を両腕を広げて喜んで迎える父親のような神さまの心です。私たち一人ひとりの抱えている十字架を神さまは共に担ってください、どんなに小さな喜びも一緒に喜んでくださいます。神さまの私たちへのいつくしみを思い起こすことが、私たちもいつくしみを持って生きようになる第一歩だと思います。

聖なる扉を通る時、神さまの心がいつも私たちに開かれていることを体験します。開かれた心によって神さまは私たちと一つとなっていつも共にいてくださいます。聖なる扉をくぐる時、私たちもまたこの世界に向けていつも開かれているものであるようにとの呼びかけを思い起こすことができます。開かれた心によって、世界が今体験している様々な困難も喜びも同じ心で共にすることができます。神さまのいつくしみ深さを味わう特別聖年が恵みの時となりますように、そして私たちが真にいつくしみ深い存在となれますように。(完)

#### 松本神父さまに関する原稿 etc の募集

皆様の心に深く刻まれた松本神父さまの思い出や、交わり、教え、お人柄などを、池田教会の共有財産として残したく思います。松本神父さまを偲ぶ文をぜひ「からしだね」へお寄せください。(字数は2000字以内、最終締め切りは11月20日。デジタル原稿は広報委員会のメール・アドレス、[auaad433@wombat.zaq.ne.jp](mailto:auaad433@wombat.zaq.ne.jp)へ送信してください。手書き原稿は広報委員へ手渡してください。)

また、「松本神父の遺稿集(仮称)」やデニス神父の「退任記念誌(仮称)」のために著作を収集し、冊子を編集する方を募集しています。

広報委員会

## 健軍カトリック教会からの手紙

カトリック池田教会 主任神父様  
信徒の皆様

主の平和

残暑お見舞い申し上げます。池田教会の皆様お元気でしょうか。あの日から早いもので3ヶ月が過ぎてしまいました。あの当時のことを思い出すと、何をどのようにしていたかを思い出すことが出来ません。ただ、余震に怯えながら毎日をただ過ごしていたように思います。現在は物事を見る上で少しだけ余裕が出てきたように思います。

さて、私たちの教会は今回の地震の震源地とされる益城町に隣接しています。そのため、益城町に住居を構えていた信徒には住まいを失い避難生活を余儀なくされ、転居した者もいます。また、西原村には高遊原巡回教会があり、この地区のすべての信徒も被災し、家屋の屋根はブルーシートに覆われたままです。このような状況の中で心のこもったご支援を頂き誠にありがとうございます。

今回、この地震によって私たちは多くの物を失いましたが、これまで見過ごしていた家族の絆を強く感じ、地域や皆様の暖かい援助と励ましの言葉などを頂き、ありがたく感謝の気持ちでいっぱいです。

「神様は私たちが乗り越えることが出来ない試練を与えられることはない」との信仰のうちに復興への道を少しずつ歩み出しています。しかし、復興への道は始まったばかりで、多くの困難が立ちはだかっていることでしょう。これからも皆様をはじめ多くの方々のお祈りと力添えが必要です。よろしくお願い致します。特に困難の為に心が折れそうになるでしょうから、聖母マリア様の執り成しをお祈りください。

健軍カトリック教会 信徒一同  
主任司祭 浦川 務

## 表紙の絵画「郊外のキリスト」について

ジョルジュ・ルオーの作品。ルオー(1871-1958)はパリに生まれ、ステンド・ガラス職人を経験して、絵画に転じたという。現代では稀有の宗教画家。ステンド・ガラスに見られる鉛で縁取られた赤色・黄色・緑色の光は絵画では絵具の重ね塗りとなり、忠実な精神が現れる。「郊外のキリスト」には、煙突のある工場地帯の住宅街で月光に照らされた子供の傍らに貧しいキリストが寄り添う。 東京都のブリジストン美術館蔵。

## 黙想会のお知らせ 宝塚黙想の家から

### ■日帰り黙想会

10月27日(木)10:00～15:30

指導:山内十束神父

10月28日(金)10:00～15:30

指導:山内十束神父



### ■週末黙想会

10月29日(土)17:00～30日(日)15:30

指導:山内十束神父

各黙想会、費用等のお問い合わせは  
「宝塚黙想の家」まで。☎0797(84)3111

## 編集後記

父なる神がわたしたちを包み込んでくださるものを表現するのに、いくつかの言葉が考えられます。愛、慈愛、慈悲、憐れみ。今年は「慈しみ」という優しい表現が選ばれています。マザー・テレサの思いと行動はまさに「慈しみ」そのものです。松本神父様の笑顔は慈しみに満ちていました。「慈」とは、もともとは、衆生に薬を与える、という意味です。はやりの言い方をすれば、癒やし、です。わたしも自分と関わりのある人々はもちろん、遠い外国に住む人々にも、そして動物や植物、衣服、食物、各種の製品に至るまで、「慈しみ」の心、優しい気持ちで考え、接することができますように。 ソフィー